

ブランクを経た女性のキャリア形成：公営競技女子選手を事例として

福井，弘教
横浜国立大学大学院環境情報学府

<https://doi.org/10.15017/7347448>

出版情報：ポリモルフィア．10，pp.100-105，2025-03-21．九州大学男女共同参画推進室
バージョン：
権利関係：



エッセイ

ブランクを経た女性のキャリア形成 —公営競技女子選手を事例として—

福井弘教

横浜国立大学大学院環境情報学府

1. 背景と目的

近年、本邦では、これまで男性が主流と考えられていた職種に女性が就くケースが散見される。タクシー、トラック、バスなどのドライバーとして働く女性も今日では日常の光景となった。こうした事象をみると、女性の社会進出が拡大しているかのように思えるが、実際はどうであろうか。

厚生労働省「働く女性の状況 I 令和4年の働く情勢の状況」によれば、2022年の女性の労働力率（15歳以上人口に占める労働力人口の割合）は54.2%と前年と比較して上昇した。生産年齢（15～64歳）については、労働力人口は2718万人（前年比15万人増）、労働力率は74.3%（前年比1.0ポイント上昇）となった。2012年と比較すると、全ての年齢階級で、労働力率は上昇しており、女性の年齢階級別労働力率の図としては、M字型から台形に近づきつつある。「M字型」とは、国際比較の文脈で、就業と結婚、出産といった家庭の両立が困難である日本の象徴とされてきた。しかし、近年の変容は女性の社会進出を如実に表していると考えられる。換言すると、結婚、出産といったイベントが必ずしも就業継続に影響を与えない、もしくは既成概念に捉われない選択をする

る女性が増加していることが推察される。

結婚、出産、ともに人生の一大イベントといえる。会社員の場合、人事部などへの一定の報告は要するかもしれないが、本来、結婚自体は客観的に就業との関連はないと考えるのが妥当であろう。すなわち、ある勤労女性が結婚をしても、本人が関連する行動、言動を発しなれば、客観的には一勤労者に過ぎない。しかし、出産は就業継続に影響を与え、出産によって本人の就業への考え方も変容する可能性がある。すなわち、出産は客観的にも周囲に認知されるし、結婚と比較すると本人の精神、身体にも大きな影響を与えると考えられる。上述したように、M字型から台形へと近づきつつある最大の要因は、近年の出生率が示すように少子化の進行であろう。この傾向は長く継続していることから、少子化と女性の社会進出の趨勢は注視が必要である。

ワーク・ライフ・バランスの視点が不可欠で[原2016]、時代が変わっても出産がキャリアに与える影響は、結婚と比較すると大きいことは明らかである。今も昔も、出産を経てキャリアを重ねる女性は存在する。そして、高齢社会においては、出産のほか、子育て、介護、病気など、さまざまな理由から一定のブランクが生じる可能性は

誰にでもある。たとえば、育児休業制度を利用して就業を継続する人は増加し、子育て世代の女性の就業率は徐々に上昇してきた（中略）特に正社員として就業を継続するためには育児休業の取得が重要であることはわかってきている〔樋口ら2023：168〕。

本稿では、キャリアを重ねてきた女性にブランクが生じて、職場復帰、さらなるキャリア形成を目指す場合に、どのような環境が必要となるのか探ることを目的とする。対象として男性選手が主流である公営競技の女子選手を事例として検討する。公営競技とは、賭けの対象となる競技のことであり、競馬、競艇（ボートレース）、競輪、オートレース（オート）の競技を指す。公営競技の詳細については拙稿〔福井2017,2018〕を参照されたい。なお、2024年10月現在、各競技の女子選手数（騎手数）は以下の通りである（表1）。競艇については随時更新されているが、他競技については引退などにより数値の齟齬がありうる。競艇と競輪の女子選手数が他の競技と比較すると多くなっている。

表1：公営競技の女子選手（騎手）数

区分	女子選手（騎手）数
中央競馬	6
地方競馬	11
競艇	268
競輪	206
オートレース	22

出典：各競技 HP を参考に筆者作成

2. 方法

公営競技の女子選手で、出産を経て復帰した現役選手を各競技それぞれ抽出する。上述したようにブランクといっても多様に考えられるが本稿では「出産」というブランクに着目する。関連する情報を抽出して（一部論文として適当ではないと考えられる表記は改変する）、職場復帰、キャリア形成の要因を探る。情報については、当該選手に関する文献、報道のほか、各競技関連の公式HP、本人発信の公式ブログなどの情報に依拠する。

対象選手としては、以下の4名とする。

競馬…宮下瞳騎手（地方競馬，鹿児島県出身）
1995年騎手デビュー、引退後、2016年再デビュー

競艇…日高逸子選手（宮崎県出身）
1985年デビュー

競輪…大久保花梨選手（佐賀県出身）
2017年デビュー

オートレース…吉川麻季選手（大分県出身）
2017年デビュー

最も早くデビューしたのが日高選手、順に宮下騎手、大久保選手、吉川選手は同年デビューである。

3. 結果

結果の記述はいずれも、当時の記述に依拠している。

1) 宮下瞳 騎手

一旦騎手を引退した後に復帰した騎手であり、

夫は元騎手である。

1995年に騎手デビュー、2011年8月に引退し、2016年8月に復帰した。2021年には女性騎手として初めて地方競馬通算1000勝を達成した〔朝日新聞デジタル〕。

以下、オッズパークに掲載されたインタビューより抽出した（**太字**はインタビュアー、紹介文など）。

家庭との両立も大変かと思いますが、原動力は何ですか？

やっぱり子供たちですね。帰宅すると息子が「どうだった？」と聞いてくれて、「勝ったよ」って言うので喜んでくれるんです。勝てなかった日でも「また明日がんばればいいじゃん」って励まされたり。嬉しいですね。

忙しいということですね。

鹿児島から来てくれている父のサポートがなかったら復帰できていないですよ。本当に助かっています。今は開催がないときは2時から8時くらいまで調教に乗って、そこからは主婦の時間。洗濯して買い物に行って、4時頃に保育園にお迎えに行って、ちょっと時間が取ればトレーニングですね。夜は9時には寝て、1時半に起床です。ご飯は業者さんを利用しようという話をパパ（小山信行騎手）としていたんですけど、私がそれではちょっとダメかなと思ったので、自分でやるようにしています。自分がまた騎手になると決めた以上はしっかりやらないと。父に頼りすぎてもいけないので、自分でできることは自分でするようにしています。

復帰するためにはいろいろと課題があったと思いますが、条件が揃ったような感じがありますね。

本当にそうですね。ウチの子が待機児童になら

なかったことがなにより。名古屋はけっこう多いですよ。それに保育園も自宅から近くて、運がよかったなあと思いますね。今は本当に毎日が楽しいです。負ければそれは悔しいですけど、それを含めても楽しい日々を過ごさせてもらっています。復帰してよかったなあと思いますね。

2) 日高逸子 選手

後述するように、2児を出産しており、2013年の時点で生涯獲得賞金が8億円を超えている。現在では、散見されるようになった「主夫」の役割を結婚当初から夫が担っている〔福井2018〕。

以下、福岡県男女共同参画センターあすばるの記述より抽出した。

全国でレースに挑むため、1か月のうち20日ほどは家を空ける。34歳で結婚した夫は東京在住だったが、自分が福岡で“主夫”をすること、日高姓になることを快諾。おかげで日高さんは、2児を出産後も2か月で仕事に復帰した。「優しい夫を信頼しているから、何でも安心して任せられる。産休明けにボートに乗るときは、うれしくて楽しくてたまらなかった」と笑顔をみせる。デビューから28年、今はママレーサーも多いという。

以下、日本経済新聞の記述より抽出した。

2児の母で最初の子供を産んだのが、デビュー13年目の年。レーサーとしての勝負どころにさしかかっていた。

レーサーにはクラスがあり、B2、B1、A2、A1と上がっていく。クラスが低いとレースの賞金が安く、出場できるレースの数自体が少ない。クラスが上がるに従って稼げるようになる仕組みである。

この階段をかけあがる途中で育児の時期が重なった。出産後3カ月もたたないうちに、レースに復帰したのはブランクの長さが致命傷になりかねなかったことによる。

「この仕事は休んだら休んだだけ下手になる。選手によっては子供を生んだあと1年休む人がいますが、私にはそんなに休むなんて考えられなかった。B級のままでいいや、となったらいくらでも休んでいたと思いますが、上のレベルで戦いたいっていうのがあったんです。子供も大事だけれど、自分も早く復帰したかった」男性優位の世界でうまく折り合いをつけてきた夫が専業主夫として支えてくれたが、授乳期はつらかった。レース開催中は不正防止などの目的もあって、選手はレース場近くの宿舎に缶詰めになり、外部との連絡を断たれる。乳飲み子なら入れてもいいでしょう、という甘い世界ではない。

選手は全国の開催地を転戦し、1週間レースに出ては1週間休む、といった生活パターンを繰り返す。「もうすぐレースに出かけていなくなるというのは赤ちゃんでもわかるんですね。目が潤んでいるんです。それを見るとああ、やめたとか、子供と一緒にいたい、とか思います。でも（そんな気持ちを抑えるのも）プロには必要なんで」。レースの期間中、飲み手のいないお乳が張ってくる。宿舎で搾って冷凍し、レース最終日に夫に送った。子供に会えるまであと3日、2日と、指折り数えていた。

「ママさん選手なら誰でもやっていること」と当人はあっさりしたものだが、この我慢がレース人生の勝敗を分けたようにもみえる。レーサーとしての才能がないと言いながら、男性選手と対等に渡り合うことを可能にしているものの姿が垣間

見える。

現在最高クラスのA1級に属しているのは325人で、うち女性が20人。成績に応じて算出されるポイントに応じ、半年ごとに入れ替えがある。このA1級の地位を日高はずっとキープし、女性では歴代2位にあたる賞金を獲得してきた。

3) 大久保花梨 選手

夫の職業は非公表である。既に通算48回の優勝歴がある [KEIRIN.JP]。

以下、netkeirinの記述より抽出した。

8月に産休から復帰し、即優勝を挙げ話題となった大久保花梨選手（26歳・福岡=112期）。デビュー時から期待を集めトップレーサーとして活躍したが、23年4月から長期欠場。8月に産休を経て復帰し、いきなり優勝するところまで4開催で3Vを挙げている。若き“ママさんレーサー”が目指す先は…。

4) 吉川麻季 選手

夫はオート選手である。レース中の事故、出産を経て初優勝を果たした [Auto Race.JP]。

以下、オートレースモバイルの記述より抽出した。オートでは吉川選手と同時期に出産を経て復帰した選手がおり、当該選手の記述を含める。

2024年3月29日、吉川麻季選手（飯塚）が約2年ぶりにレース復帰。また、6月6日、岡谷美由紀選手（浜松）が約1年7か月ぶりにレース復帰を果たしました。

長期休場となっていた二人には共通点がありました。

それは、“妊娠・出産”を経て、ママになって

復帰したことです。オートレースにもついにママさんレーサーが誕生しました。オートレースに女子選手が再度誕生してからこれまでも妊娠し休場していた女子選手がいましたが、復帰を果たすことができませんでした。

では、出産を経て復帰をした二人はどんな思いを持っていたのでしょうか。

まず、ママさんレーサーとして先に復帰した吉川選手。

「最初は怪我で休場していたんですが、そのあと妊娠がわかりそのまま休場することになりました。でも実は…、復帰しようと思っていなかったんです」すなわち、引退を考えていたとのこと。

「スタート落車して、人を落として自分もケガしてしまっ。て。みんなお互い様って思っているだろうし、私もそう思っているし、きっと誰もが通る道だったと思うんですけど、私ってオートレースを続けていいのかなあ、向いていないなあ、もう辞めたいなあって思い始めてしまっ。て」と、当時の胸の内を話してくれました。そう、妊娠が原因ではなく、走ることへの不安でした。

4. 考察

以下では、選手などの敬称は省略して表示する。

同業者との結婚が少なくとも2名にみられ、仕事に対しての理解があるといえる。もちろん、日高の夫についても「主夫」になることを条件に結婚しており理解があったといえる。結婚を機に引退する女子選手は多いが、同業者と結婚することで復帰に向けては好影響を与えと考えられる。

宮下の記述から、家族のサポート、保育園などの社会的インフラの充実も不可欠となる。また、

子の成長に伴って子が母の仕事について理解するようになり、それがモチベーションにつながることなどが明らかとなった。

日高の記述から、高い次元でキャリア形成を見据える場合、長期の休みが難しいこと、主夫である夫のサポートが重要であったことが明らかとなった。

大久保、吉川は出産を含む長期欠場のブランクがあった。大久保がおよそ1年4か月、吉川が2年という期間、レースから離れていた。日高の数か月と比較すると長い。これは競技の差異だけでなく、各競技の女性選手に対する産休、復帰に関連する制度が柔軟に変容したことが影響していると推察される。大久保は復帰後、優勝を量産し、「復帰への不安」もあったとされる吉川も初優勝を飾った。

総括すると、出産を経たキャリア形成において、家族の理解・サポート、社会的インフラ、関連制度の充実が重要であるといえる。競輪とオートに関しては現行の女子レースは再開されて10年弱であり、経過を注視する必要があるが、40代、50代となってもキャリア形成が可能な点を鑑みると公営競技界においては好転した状況となりつつあるといえる。成績を残せばキャリア形成、継続は可能であり、その点においては恵まれた職業といえるだろう。(たとえば、アナウンサー職の継続は容易ではない。なおアナウンサー職については拙稿〔福井2024〕を参照されたい)。

文献

原伸子, 2016, 『ジェンダーの政治経済学—福祉国家・市場・家族』有斐閣。

樋口美雄・田中慶子・中山真緒, 2023, 『日本女性のライフコースー平成・令和期の「変化」と「不変」』慶應義塾大学出版会.

福井弘教, 2017, 「公営競技の形成と展望ー競艇を中心にー」『公共政策志林』(5), pp.149-163.

福井弘教, 2018, 「SDGs Goal 5の達成に向けたソーシャルインパクトの創造ー競艇女子選手の労働環境にみるジェンダー政策を手がかりにー」『法政大学大学院紀要』(80), pp.127-142.

福井弘教, 2024 「地方テレビ局における女性アナウンサーの労働環境とキャリアー首都圏3県に焦点をあててー」『地域イノベーション』(16), pp.13-24.

WEBサイト

朝日新聞デジタル,
「宮下瞳さん、女性騎手初1千勝の裏に息子の言葉 出産で引退も復帰」<https://www.asahi.com/articles/ASS574W4KS570IPE00RM.html>
(2024/10/20閲覧)

アメバブログ,「元女性騎手宮下瞳の子育て育成牧場」
<https://ameblo.jp/hitomi-miyashita/>
(2024/10/20閲覧)

Auto Race.JP, 「吉川麻季選手プロフィール」
https://autorace.jp/race_info/Profile/9014
(2024/10/20閲覧)

オートレースモバイル,
「岡谷美由紀選手・吉川麻季選手 二人のママさんレーサー」https://sp.atrc.jp/column/top/group_id/1801/column_id/20545 (2024/10/25閲覧)

オッズパーク,「宮下瞳騎手ジョッキーインタビュー」
<https://blog.oddsparc.com/jockey/cat57/cat253/> (2024/10/19閲覧)

KEIRIN.JP, 「選手プロフィール」
<http://keirin.jp/pc/racerprofile?snum=015231>
(2024/12/18閲覧)

厚生労働省 (n.d.), 「働く女性の状況 I 令和4年の働く情勢の状況」<https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/22-01.pdf>
(2024/11/1閲覧)

地方競馬, 「PROFILEー宮下瞳」
<https://www.keiba.go.jp/ladiesjockeys/profile/miyashitahitomi/> (2024/11/3閲覧)

netkeirin, 「大久保花梨 産休から復帰後すでに3V! たくましさ増し帰ってきた26歳の目標は『子育てと両立してグランプリ出場』」
2024/9/27

https://keirin.netkeiba.com/news/column_detail.html?id=3982 (2024/11/3閲覧)

福岡県男女共同参画センターあすばる,
「日高逸子(ひだかいつこ)さん 2013年6月取材」
<https://www.asubaru.or.jp/92466.html>
(2024/11/3閲覧)

BOAT RACE オフィシャルウェブサイト, 「日高逸子(期別成績)」
<https://www.boatrace.jp/owpc/pc/data/racersearch/season?toban=3188> (2024/10/28閲覧)

日本経済新聞, 「生涯賞金8億円 ボートの女神は元信金職員」2013年12月12日
<https://www.nikkei.com/article/DGXBZO63694260W3A201C1000000/>
(2024/10/23閲覧)

謝辞

本稿は、法政大学の原伸子名誉教授との関連が起点となっている。ここに記して感謝申し上げます。